

P-128 マムシ咬傷時の当院使用薬剤について

○齊藤翔太<sup>1</sup>、田畑佳祐<sup>1</sup>、池尾崇志<sup>1</sup>、數田素子<sup>1</sup>、森田紗代<sup>1</sup>、雀部貴美代<sup>1</sup>、石田達彦<sup>1</sup>、安福修平<sup>1</sup>、吉田直恵<sup>1</sup>、中島高広<sup>2</sup>  
(<sup>1</sup> 柏原病院薬剤部、<sup>2</sup> 柏原病院診療部)

【はじめに】

マムシ咬傷は本邦で年間2000～3000件発生し10名程度死亡する疾患である。当院は丹波地域の基幹病院として診療所等からマムシ咬傷患者の紹介があり、外科医や外科以外の当直医、研修医が対応している。

当院では平成25・26年度にマムシ咬傷と診断された症例が21例あった。その際、医師や看護師から使用する薬剤についての問い合わせがあった。しかし薬剤師としての経験が少ない職員も多く、特に一人勤務時には問い合わせに回答するために時間を要することがあった。今回、経験年数に関係なく適正な情報を迅速に提供するための体制を整えたので報告する。

【方法】

①平成25・26年度に当院でマムシ咬傷と診断され治療を受けた症例に対し使用された薬剤についてカルテレビューにより後方視的に調査した。

②調査結果をもとに使用された薬剤についての必要事項をまとめた資料(図1)を作成し、添付文書、当院独自のマムシ咬傷治療マニュアル(図2)とともに部に設置した。また、マムシ咬傷時に使用される薬剤についての勉強会を部内で実施した。

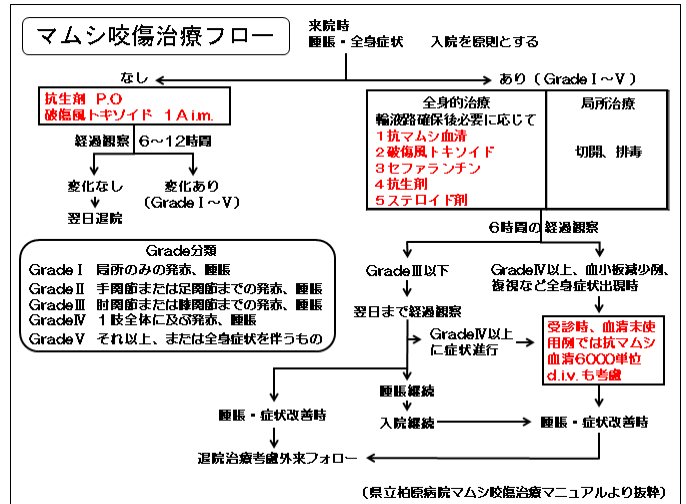


図2 マムシ咬傷治療マニュアル

【結果・考察】

①調査期間に当院でマムシ咬傷と診断されたのは21症例あり、そのうち18症例で入院治療を行った。患者の平均年齢は69.1歳(±13.48)、男女比は13:8であった。使用された薬剤はマムシ抗毒素が3例、セファランチン注が12例、破傷風トキソイドが5例、副腎皮質ステロイドが13例、抗生物質が11例、キョウミノチンが2例、輸液が17例(重複有り)であった。

②使用された薬剤について必要事項をまとめた資料を作成したことにより、経験年数に関係なく適正な情報を提供できるようになった。また、必要な情報が集約されているため、回答するまでに要する時間を短縮し迅速に回答できるようになった。

特に薬剤師としての経験が少ない薬剤師程回答に要する時間を短縮することができたと考える。

【まとめ】

当院は地域的にマムシ咬傷と診断される患者が多い。その多くは適切な治療を行うことで数日の入院で軽快する。

今回、マムシ咬傷患者来院時の医薬品情報提供を正確かつ迅速に行える体制を整える取り組みを行った。この取り組みにより、マムシ咬傷に対する医薬品適正使用に寄与することができた。

乾燥まむしウマ抗毒素
● 使用方法
① 添付の注射用水20mLで全量を溶解する。
(アレルギー-皮内テスト)
② ①の0.1mLを抜き取り生食で10倍に希釈する。
そのうち0.1mLを皮内注射し、30分全身症状の有無を観察する。
【判定基準】(陽性) 高度の過敏症: 著しい血圧の降下、冷汗、四肢末端の冷感、顔面蒼白、呼吸困難等の全身症状の発現
軽度の過敏症: 直径10mm程度の紅斑、発赤又は膨疹
(陰性) 上記の判定基準未達
③ 陰性あるいは軽微の場合、①の1.0mLを皮下に注射し30分経過観察する。
④ その後、①を生食等で10-20倍に希釈して点滴静注(1-2mL/分)する。
(当院治療マニュアルでは、皮内テスト強陽性の場合抗毒素の投与は行わない。)
● 使用目的
生体内に遊離状態にある毒素を完全に中和するが、組織に結合した毒素は中和しにくいといわれており、咬傷後できるだけ早く投与することが効果的である。ただし、状況によっては咬傷後48時間経過後に投与したとの報告もある。
● 即時型アレルギー-反応発現時
① アドレナリン: 0.3-0.5mgを筋注する。
② 細胞外液の補充: 低血圧・頻脈を認める症例では少なくとも20mL/kg(成人の場合1-2L)を投与する。
③ ヒスタミン拮抗薬: H1拮抗薬とH2拮抗薬を併用して投与する。
④ 副腎皮質ステロイド剤: プレドニゾンとして10-30mg/dayを投与する。
● ウマ由来製品
過去にウマ由来製品の使用歴がある患者への投与は、即時型アレルギー-反応を生じる可能性があるため慎重に行う。
【ウマ由来製品】
抗ヒト動物組織免疫グロブリン(リンフォグロブリン®: 2008年製造中止)
抗ヒトリンノ球ウマ免疫グロブリン(アールプリン®: 2005年製造中止)
乾燥まむしウマ抗毒素、乾燥はぶウマ抗毒素、乾燥破傷風ウマ抗毒素、乾燥ジフテリアウマ抗毒素、乾燥ジフテリアウマ抗毒素、乾燥ガス腫ウマ抗毒素
出典: 添付文書、イグマ、県立柏原病院マムシ咬傷治療マニュアル、厚生労働省「いぐま」、週刊医学界新聞 第2968号

図1 作成資料